

平成27年度 地域連携事業報告書

地域教育実践研究センター



学校法人福原学園
九州女子大学・九州女子短期大学

「平成27年度地域連携事業報告書」の発刊にあたり

九州女子大学・九州女子短期大学
学長 福原 公子



本報告書は、この1年、地域教育実践研究センターの古城所長を中心に、九州女子大学・九州女子短期大学が地域と垣根を越えて連携する新たな関係のあり方を模索し、多くの方々のご協力を得ながら進めてまいりました事業実績を記録したものです。

九州女子大学・九州女子短期大学は、平成27年6月、本学がこれまで取り組んできた教育・研究を地域社会の発展に資するため、地域教育実践研究センターを設置致しました。本学を設置している福原学園は、これまで地域と共に歩むことを標榜し、現在に至っています。本学も学園の活動理念に従い、地域と連携し、様々な事業を展開してまいりました。今後は更に、大学が蓄積してきた学術成果を地域社会の発展と活性化に役立てたいと願っています。併せて、地域社会の皆様と共に連携・協力することを通して、地域社会に貢献できる人材の育成を目標にしています。本センターでは、今後も種々の事業を計画・実施するとともに、地域社会の皆様のニーズや要請にも迅速に対応できるよう鋭意努力してまいります。

この度、本誌を発刊し、本センターが発足して1年目の事業実績についてご報告申し上げますとともに、これまでお世話になりました関係各位に深くお礼申し上げます。

目 次

1. 大学が地域連携する意味	2
2. 組織と業務内容	3
3. 平成27年度の取り組み	3
4. 平成27年度の地域連携事業	4
北九州市放課後児童クラブの振興に関する連携事業	
文系インターンシップ推進モデル事業(COC+事業)	
北九州市教育委員会との学生ボランティアに関する協定事業	
芦屋町との包括協定に向けた取り組み	
5. その他の地域連携諸事業	13
食の都(みやこ)構想事業	
折尾地区防犯啓発イベント	
九女型人材育成プログラム「オフキャンパス研修」	
若松区中川町の旧住宅街における空き家再生、地域活性化活動「ワカマツグラシ」	
6. 学外実習および介護等体験、教員免許状更新講習等	15
平成27年度 学外実習および介護等体験の実績	
教員免許状更新講習の受講者推移(平成21年度～平成27年度)	
平成28年度 教員免許状更新講習の開設予定講座(8/5～8/10)	

1. 大学が地域連携する意味

本学は、「地域に根差した実践教育を展開する大学」として、これまで取り組んできた教育・研究を地域社会の発展に資するため、平成27年6月1日に地域教育実践研究センターを設置した。

地域教育実践研究センターでは、学部・学科および教員個々が実施してきた地域との関わりについての実態調査や地域が抱える課題や要望等を把握のうえ、「学生の質保証の強化」、「大学の教育・研究機能の活用」および「地域社会との共生」の3本柱を軸として、地域連携事業の在り方を検討し、本学の地域貢献(型)による大学創りに取り組む。

地域教育実践研究センターの3本柱

【①学生の質保証の強化】

地域課題(ニーズ)と大学資源(シーズ)を把握し、地域の課題を解決するための学生ボランティアの育成を実践するとともに、学生の実学的教育を実践する。また、学生自身の研究テーマを設定して臨地研究を行うことにより、学生の研究論文に繋げていく。

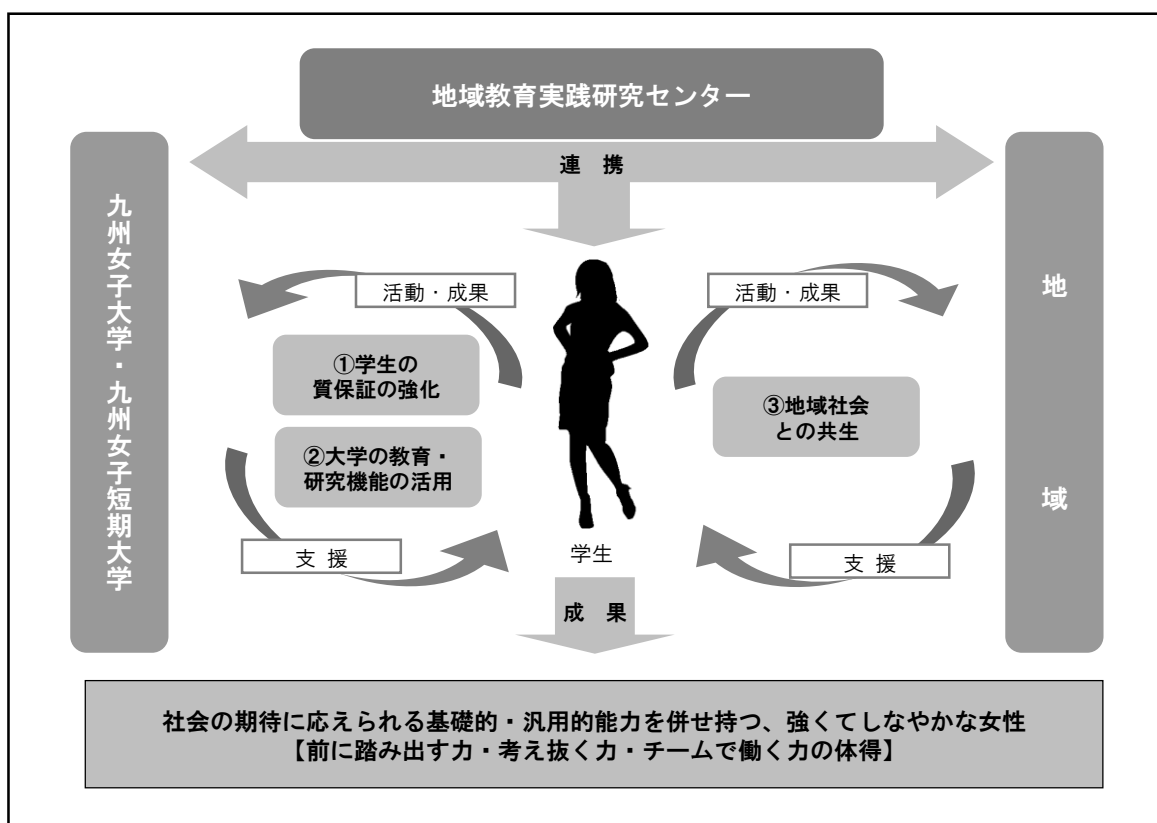
【②大学の教育・研究機能の活用】

地域課題の現状調査を行い、データを分析し、これに対応する教育プログラムを作成する。また、教員による地域への出前型講座等を学生ボランティアと実践し、事業評価を行う。

将来的には、「地(知)の拠点」として地域(自治体・企業等)と地域課題を解決する補助事業や共同研究の実施も視野に入れる。

【③地域社会との共生】

本学と自治体が組織的・実質的に協力し、地域課題と大学資源のマッチングにより、地域と大学が必要と考える取り組みを実践することで地域との共生を実現させる。



2. 組織と業務内容

1. 組織

地域教育実践研究センターには、センター所長、センター副所長、事務職員を置き、適正な管理運営を図るため、地域教育実践研究センター運営委員会を設置している。地域教育実践研究センター運営委員会は、センター所長、センター副所長、教務部長、学生部長、事務局長、大学・短大の各学部等から学長が推薦する教育職員、その他学長が必要と認めた職員で組織している。

組織的に事業に取り組むため、事業案件を地域教育実践研究センター運営委員会で審議し、部局長会議で報告のうえ、評議会で審議・決定する。

平成27年度地域教育実践研究センター運営委員会 委員

所 属	氏 名
地域教育実践研究センター 所長	古城 和子
地域教育実践研究センター 副所長	澤田 小百合
教務部長	奥田 俊博
学生部長(家政学部/栄養学科)	巴 美樹
家政学部/人間生活学科	西田 真紀子
人間科学部/人間発達学科 人間発達学専攻	鎌田 義彦、神代 明、春高 裕美
人間科学部/人間発達学科 人間基礎学専攻	大島 まな
共通教育機構	山下 高之
子ども健康学科	大江 康夫、橋口 文香
事務局長	因 敏明
教務課長	重田 勝弘
地域教育実践研究センター	山本 克子、石田 美由紀

※委員会事務局：竹内 千絵、松田 裕次郎

2. 業務内容

地域教育実践研究センターは、以下の業務を実践・研究するため、学科、個人単位で実施していた地域貢献活動の一元化を図るとともに、外部からの依頼に関する窓口としての機能も有する。

また、地域貢献活動については、地域教育実践研究センター運営委員会の検討を踏まえ、各学部等から選出された運営委員により、学科会議等において検討内容の共有に努めることとしている。

地域教育実践研究センターの業務内容

- ①地域教育実践研究活動に関する学内情報の一元管理に関すること
- ②地域教育実践研究活動の学内外への広報ならびに情報の提供に関すること
- ③地域教育実践研究活動に関する対外的な窓口機能に関すること
- ④地域教育実践研究活動の教育実践プログラムおよび研究プロジェクトに関すること
- ⑤地域教育実践研究活動に関する連絡調整に関すること
- ⑥学校インターンシップおよび学校ボランティアに関すること
- ⑦学外実習および介護等体験に関すること
- ⑧教員免許状更新講習に関すること
- ⑨その他地域教育実践研究活動に関すること

3. 平成27年度の取り組み

平成27年度については地域教育実践研究センターにおいて、以下の事業を実施してきた。

- ①芦屋町との包括協定に向けた取り組み
- ②放課後児童クラブに関する連携事業
- ③北九州市公立学校でのボランティア活動における協定
- ④北九州市立大学主催のCOC+事業
- ⑤平成28年度事業計画の策定

平成28年度の事業計画を以下のとおり策定し、平成27年度第3回地域教育実践研究センター運営委員会(平成27年11月19日開催)において審議のうえ、平成27年度第7回評議会(平成27年11月26日開催)において審議・決定した。

- ①自治体や企業との連携事業「芦屋町」、「北九州商工会議所」
- ②北九州市との連携事業「放課後児童クラブ」
- ③文系インターンシップ推進モデル事業および九州インターンシップ推進事業
- ④各種ボランティアへの派遣事業
- ⑤センター報告書の作成
- ⑥先進事例の視察

4. 平成27年度の地域連携事業

◆北九州市放課後児童クラブの振興に関する連携事業

1. 概要

平成25年9月1日に本学と北九州市で「北九州市放課後児童クラブの振興に関する連携」について協定を締結した。本協定に基づき、平成26年度から本学と北九州市の連携会議において、放課後児童クラブにおける児童への対応の充実に向け、検討を重ねた結果、様々な課題があることが明らかになった。このことから、本学の研究成果を生かした研修プログラムを策定するため、4領域(①生活、②遊び、③活動・行事、④衛生等)を設定し、アンケート調査を実施した。このアンケート結果で抽出した領域ごとの要望をさらに細分化し、カテゴリ別に整理することで研修プログラムを策定した。今年度については、要望のあった4個所の児童クラブに4人の教員を派遣し、指導員等を対象に研修を実施した。

2. アンケート結果

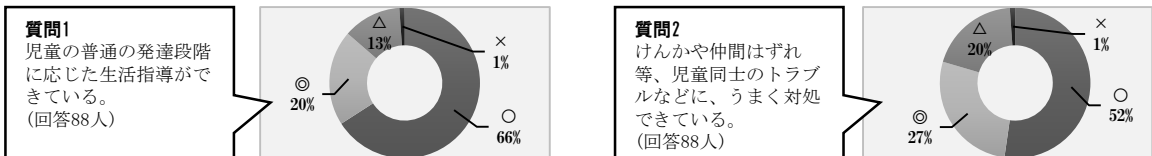
(1) アンケート実施概要

- ・10児童クラブに依頼 ・回答数：88人 ・実施時期：平成27年3月中旬から4月下旬
- ・実施方法：八幡西区内を中心に児童クラブをピックアップし、用紙を各児童クラブに配布

(2) 質問内容と回答内容

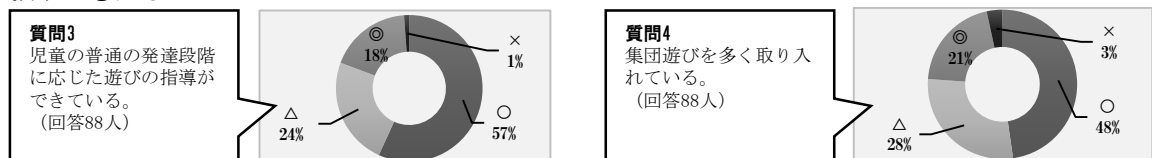
◎そう思う ○どちらかといえばそう思う △どちらかといえばそう思わない ×そう思わない

領域：①生活



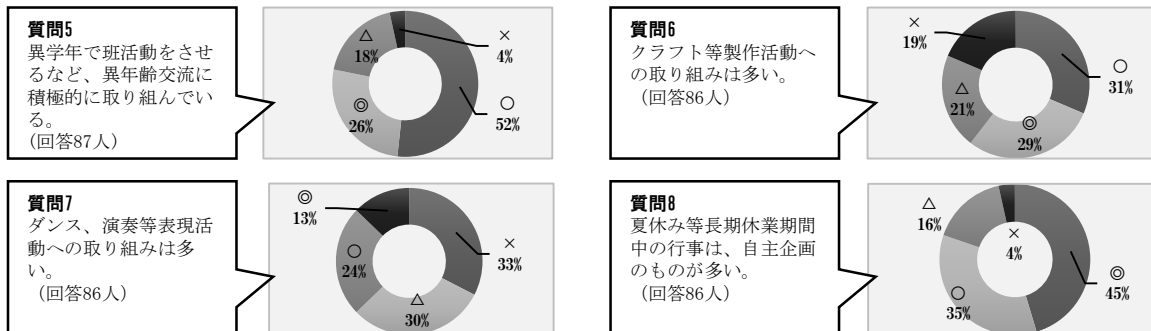
カテゴリ	要望
発達障害	① 障害児と健常児の間（ボーダー）のような子どもの生活指導に不安があるので、そのような子どもへの対処の仕方の研修があればいいと思う。 ② 発達障害やボーダーラインの子どもたちに関する研修があれば参加したい。 ③ 発達障害を持った児童に対する指導方法などの研修 ④ 落ちつきのない児童（グレーゾーン）の対応、声かけ等
保護者クレーム対応	① 児童同士のトラブルでの保護者からのクレームの対応
生活指導	① 今まで高学年については、低学年の延長としての認識や低学年の面倒をみってくれる存在にしていた部分が多いので、高学年の発達に応じた独自の生活指導の研修があればよい。 ② けんかの際に相手方に言い分がある場合の対応の仕方 ③ 親子のコミュニケーションがうまくいっていない子どもの問題行動への対応 ④ 児童と指導員との対応の仕方。例えば、問題児とのかかわり方等、具体策について勉強してみたいと思います。 ⑤ 発達段階とはいえ個人差も大きいので、どこに合わせていくのが良いか。

領域：②遊び



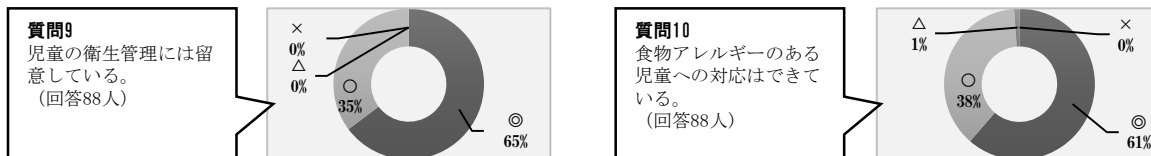
カテゴリ	要望
遊び(レク)	① 現在も、レクレーションの研修が年に1度ありますが、もう少し増やして欲しいです。 ② 高学年の遊びについても子どもにまかせていたので、どのように導けばよいのか教えて欲しい。 ③ 集団あそび（高学年） ④ 子どもの興味をひく遊びや低学年用・高学年用など年齢に合った遊び ⑤ 遊びのスペースが狭いので、限られた環境に適した遊びの指導など ⑥ 小学校高学年児童向けのもの

領域：③活動・行事



カテゴリ	要望
ダンス・手遊び	<ul style="list-style-type: none"> ① ダンスや演奏活動は素人ではできないので、三か月に一回講師を呼んで行っていますが、指導員でもできるものがあれば教えて欲しいです。 ② 以前、保育所に勤めていた時は、子どものアニメソングなどに合わせてダンスの講習会などがあっていましたが、学童でもそういうものがあれば良いと思う。またそれに合わせてCDの販売などもあれば好ましい。 ③ 浅川児童館の放課後児童クラブは200名を超えている。夏休み等にいくつかのクラスに分けて、ダンス、製作、その他希望する活動が一斉にできればともありがたい。 ④ ダンス、演奏等の活動はできていないほうだと思うので、楽しんで体を動かす活動を教えてあげて欲しい。
工作・美術	<ul style="list-style-type: none"> ① 全学年が満足する夏休みの工作で毎年悩んでいるので、そういう研修をして欲しいです。 ② 夏休みの自由研究に提出できる様な（アイデア貯金箱など）実用的なもの、作ったものを後に使うことができるクラフト等の製作の研修があれば参加したい。 ③ 科学的な実験のようなものや、動くおもちゃの製作等、子どもの興味、好奇心をそそるような体験行事があると良い。
活動	<ul style="list-style-type: none"> ① 職員の啓もう ② もっと1～6年生が気軽にできたり、夏に取り組める例を知りたい。多人数（50人以上）でも得意なボランティアや講師がいたら取り入れてみたい。

領域：④衛生等



カテゴリ	要望
おやつ	<ul style="list-style-type: none"> ① 児童に多い疾病、食物アレルギーに関する対処方法などの研修 ② 簡単で時間と手間をかけずにできる手作りおやつ作りのレシピを紹介して欲しい。
アレルギー	<ul style="list-style-type: none"> ① アナフィラキシーショックの対応（エピペン使用）の研修 ② アレルギーの「完全除去」「製造ラインから除く」など、基礎的な知識とおやつ工夫を知りたい。
不審者対応	<ul style="list-style-type: none"> ① 不審者が侵入した時の対応の仕方。子どもの誘導、カラーボールを準備して投げる等 ② 女性でも子どもたちを守れる護身術など。他に救急対応、不審者対応など。
応急処置	<ul style="list-style-type: none"> ① 応急処置の仕方。ハチにさされた、大量の鼻血、けいれん等。 ② インフルエンザの流行で子どもたちが急遽下校する場合、子どもたちを受け入れなければならないが、対象の子どもの隔離が難しい。このようなケースの対応について。

3. 研修内容と成果

(1) 領域「遊び」・カテゴリ「遊び(レク)」の研修

- テーマ:高学年における集団遊び ●担当教員:藤川 一俊
- 実施日:H28. 2. 10 ●実施クラブ:医生丘児童クラブ ●参加者:指導員7名・児童7名

研修の実施計画

1. 高学年の屋外・室内遊び

屋外ゲーム・・・サッカー キックベース ドッジボール 大縄跳び リレー ドッジビー
子どもが工夫する遊び(壁あてシュートなど狭い場所での遊び)
(雨天時)室内ゲーム・・・トランプ、UNOなどのカード 野球盤 ドミノ倒し オセロ ジェンガ
高学年は体格が良いので体育館で遊ぶ場合にはボールの空気を少し抜いて遊び、低中学年と同時に遊ぶ時には、低学年のルールを易くして変則ルールで遊ぶ。

2. リーダー中心に遊ぶ

集団遊び・・・円になって全員で遊ぶ・・・ハンカチ落とし 膝たたき うなぎによる
グループに分かれて遊ぶ・・・3拍子のリズム ボール運び
二人組で遊ぶ・・・ジャンケンごめんなさい お皿が何枚

3. 地形や敷地を生かした遊び

シュートゲーム キャッチボール 鬼ごっこ ろくむし(6虫)

4. 体育館でのあそび

ソフトバレー インディアカ 転がしドッジ ラインサッカー

5. 用具を使って遊ぶ

紅白の玉 ネット玉入れ フラフープ玉入れ 雪(紅白玉)投げ合戦

6. その他

新聞紙 段ボールなどを使って工夫した遊び

利用者の声

研修の満足度：大満足71％・満足29％・普通0％・やや期待外れ0％・期待外れ0％

※コメントを一部抜粋

- ・工夫次第で子どもを笑顔にし、一緒に遊べることを学んだ研修でした。
- ・地区ごとの研修ではなく、講師の先生に来ていただき、職場で指導を受けられることは大変良かったと思います。
- ・指導員からの押しつけではなく、子どもたちの自主性や縦割りの関係を上手く使って、自分たちで考え、行動できるように工夫して遊びを取り入れたいと思いました。
- ・実際に学童で生活されたことがある講師の方だったので、現実的なアドバイス等も共感をもって受け入れることができ、ゲーム以外にもご指導をいただき、ありがとうございました。

担当教員の感想

ゲーム中心の研修であったので、狭い教室で活動された指導者の方はお疲れだったと思います。全員で行う集団づくりゲームから始め、グループや2人組みで行うゲームへと進めていきました。子どもに返ったように楽しく遊ぶことができました。後半には実際に下校してきた児童とゲームをして遊びました。1年生から4年生の集団でしたが、上級生が下級生の世話をしながら参加するなど、日頃からの優しい態度が多くみられました。新聞紙を無人島に見立ててジャンケンをするゲームでは、負けてどんどん小さくなる島から海へ落ちまいと、みんなで手を取り合って助け合う姿が印象的でした。ゲームの最中も児童が下校してきましたが、みんな手を洗い礼儀正しくおやつをいただいていた。先生方の指導の成果が表れており、ルールを守って落ち着いた生活ができる集団に感心致しました。

(2) 領域「衛生等」・カテゴリ「応急処置」の研修

●テーマ: やってみよう! 緊急対応と応急処置 ●担当教員: 春高 裕美

●実施日: H28. 2. 12 ●実施クラブ: 鴨生田放課後児童クラブ ●参加者: 指導員9名

研修の実施計画

【研修の概要】

放課後児童クラブの指導員に求められる緊急時での役割と対処方法をわかり易く講義する。
加えて日常的に起こるケガや病気の緊急対応と応急処置について、事例を通して演習する。

【研修の内容】

1. 誰でもできる基本的な健康観察

様子をみて良いのか、明日受診すればよいのか、それとも即受診なのか、見極めるポイントを学ぶ。

2. 緊急時のいろは

緊急事態が発生した際の指導員の動き、保護者連絡のタイミングや留意点について学ぶ。

3. 事例A: プロレスごっこで頭打つ! 編

頭部外傷時の対応の実際と、見落としてはならない観察ポイントについて学ぶ。

4. 事例B: 急な高熱! 感染症かも? 隔離する? 編

インフルエンザを含む、急性感染症が発生した際の指導員の動きを学ぶ。
ひとつの空間を有効利用した隔離の方法について学ぶ。

5. 事例C: けいれんが起こった! さあ、どうする編

けいれん時の対応と、観察ポイントについて学ぶ。冷静に対応できる心構えを学ぶ。

利用者の声

研修の満足度: 大満足56%・満足44%・普通0%・やや期待外れ0%・期待外れ0%

※コメントを一部抜粋

- ・緊急事態発生時の指導員の具体的な動きがよくわかりました。
- ・何度か応急処置の研修を受けましたが、「方法を学ぶ」という研修が多く、私たち指導員の身を守る観点からでしたので、すごく耳に入りました。
- ・いくつかの事例に沿っての話でしたが、大切、重要な内容を分かりやすく、短くまとめて話してくださったので、聞きながらメモもとりやすく、自然と頭の中に入ってきました。
- ・頭を強打したり、けいれんを起こしたりという重症な事例のお話を聞き、私たちの仕事は事故と隣り合わせなんだと感じ、身が引き締められました。
- ・様々な事例と具体的な説明をしてくださり、とても分かり易かったです。その時の子どもの様子、そして、その時指導員の取るべき行動、周りの子どものこと、すぐに保育現場で実践できる研修内容でした。

担当教員の感想

指導員の皆様が、日々様々なケースに対して、考え、行動されている様子が伝わってきました。研修中も熱心に話を聞かれ、質疑も活発に行われました。

子どもの病気やケガは多種多様で、季節や年齢、子ども自身の体質などによって、出現する症状も程度も様々です。今回は60分という短い時間で、わずかなことしかお伝えできませんでしたが、今後継続して、現場の指導員の方々と共同で学びあいができれば、なお良いと思いました。私自身も今回の研修で、指導員の方々から学ぶことが多かったように思います。

(3) 領域「活動・行事」・カテゴリ「ダンス・手遊び」の研修

●テーマ:体を動かすことを楽しもう!～リズムにのって楽しく～ ●担当教員:青山 優子

●実施日:H28. 2. 16 ●実施クラブ:折尾児童館内放課後児童クラブ ●参加者:指導員11名・児童22名

研修の実施計画

1. 運動遊び

- ①体を動かす・・・・・・・・・・・・・・・・おもしろい体で動かし爽快感を味わう
多様に体を動かすことで、身体活動の楽しさを知る
二人組や三人組などグループで力を合わせて動くことを通して協力の楽しさや達成感を味わう
- ②リズムにあわせて動く・・・・・・・・音楽にあわせて動くことでリズム感を養う
リズムに合わせて楽しく体を動かすことを学ぶ
リズムに合わせて動くことで想像する力を養う
- ③子どもの健やかな心と体を育む・・・・身体表現により子どもの豊かな感性を磨く
友だちと協力して動くことで団結心や協調心を養う
体を充分動かすことで達成感や満足感を感じ、意欲を育む

2. 身体表現遊び

- ①イメージを上げ様々なものになりきって表現することを楽しむ
歌あそびからイメージしたものを身体で表現する
- ②友達と助け合いながら表現することを楽しむ
互いの表現を見合ったり助け合ったりして表現することを通して、子ども達同士の調和を養う
- ③音楽によってイメージをさらに深め、表現することを楽しむ
様々な音楽によりイメージを膨らませて、色々な身体表現を楽しむ

利用者の声

研修の満足度:大満足27%・満足73%・普通0%・やや期待外れ0%・期待外れ0%

※コメントを一部抜粋

- ・体を動かすだけではなく、リズム・体の動き・音楽など一体となって体幹を鍛えていくということが大事なんだとあらためて学びました。
- ・今後、子どもたちに指導する際、まず指導員が実践し、どのようなことが大切かを理解したうえで指導していこうと思います。
- ・自分自身の日頃の運動不足を反省し、音楽に合わせて体を動かす心地よさや体が伸びている感じがよくわかりました。子どもたちにも楽しい時間だったと思います。

担当教員の感想

前半の指導員を対象とした実践では、若い指導員が多く興味を持ち積極的に参加されていました。内容も充分理解し、実践に活かそうという姿もあり、終了後いくつかの質問を受けました。その反面、指導員の中には体力的に不安を感じるものもあり、自身の健康管理の面においても児童クラブにおいて運動実践を取り入れることを期待したいと思います。

後半の子どもへの指導については、対象が低学年であったためか、活動意欲が旺盛で楽しい身体表現の場となりました。身体で表現することはあまり経験がないようでしたが、当初恥ずかしがっていた子どもも、思い思いのイメージを持ち動くことを楽しめるようになりました。今日、子どもの周りには色々な音楽が存在し、接する機会が多々あるので、今後児童クラブにおいて色々な音楽でダンス(エアロビクスダンス・ヒップホップ・フラダンス・盆踊り等)を楽しむことをプログラムに取り入れ、子どもの身体活動度を上げ体力の向上に繋げるとよいと思います。

(4) 領域「生活」・カテゴリ「生活指導」の研修

- テーマ:子どもの発達特性を生かした生活集団づくり
- 担当教員:神代 明・藤川 一俊
- 実施日:H28. 2. 29
- 実施クラブ:萩原学童保育クラブ
- 参加者:指導員12名

研修の実施計画

1. 低・中・高学年の特性を生かした指導

- ① 縦割り組織づくり・・・誰もがリーダーになれる 一人一役の係 1班5～6人
- ② 1週間の生活リズムづくり・・・見通しと振り返り 掲示物・黒板で 習慣づける
- ③ 高学年も指導者会議に・・・おやつ 遊具 行事 アイデアや意見 席替え 班替え

2. 子ども同士の人間関係づくり

- ① 縦割り活動で責任感を養う・・・掃除 おやつ 整列 日直・・・協同での当番
- ② 遊びと生活のルールづくり・・・あそびの場を明確に 危険な遊びを周知
- ③ トラブルは別室で事実確認から・・・必要な時は後に全体指導
- ④ 長所や善行を全体場で褒める・・・具体的に 価値的に 一人ひとりを大切に

3. 指導者がいなくても子どもが幸せに活動できる集団づくり

- ① 上級生のリーダー(班長)が自分のグループを指導できる・・・整列・指示・報告
- ② グループの全員が注意し合える・・・認め合い
- ③ 名前を呼び捨てにせず、「くん」「さん」で呼べる・・・自分から挨拶「ただ今」
- ④ 指導者や地域の方に対して敬語が使える「です」「ます」・・・正しい日本語

基本姿勢・・・子どもには優しく 行動に厳しく 笑顔と歓声と拍手

利用者の声

研修の満足度:大満足92%・満足8%・普通0%・やや期待外れ0%・期待外れ0%

※コメントを一部抜粋

- ・子どもには、どう接したら良いか、また、高学年と低学年への接し方の違い等がすごく分かりやすい説明で良かった。
- ・高学年への指導の仕方や生活のルール作り等、聞きたかったことを的確に教えてもらいました。
- ・行動は厳しく、教育は愛情と言われた言葉がすごく印象に残りました。
- ・自分も楽しめば、子どもたちも楽しく過ごせるのだらうと感じました。遊びの中で教えてもらったことをその日の放課後に早速実践してみたら、とても楽しそうでした。
- ・日頃、子どもたちを見ている中で、言葉かけ、挨拶、生活態度など、ついついそのままにしてしまいがちなことが一番重要であり、子どもに学んでもらうためには、指導者側の心がけが必要であることを学びました。

担当教員の感想

研修に参加された指導員の方々の参加意欲と情熱の強さに驚かされました。

指導者の皆さんのお話では、クラブでの児童の生活習慣は確立できており、ほぼ理想に近い指導が展開されている様子が伝わってきました。小学校との連携も密接に図られて、歩調も方向性もぴったり一致しているため、学校の先生が学童で指導されているかのようでした。後半には、人間関係づくりのゲームを行いました。指導員の皆さんのチームワークが良すぎて予想以上に盛り上がり、まるで宴会を見ているようでした。温かい人間関係のもとに運営されている職場で、笑顔と歓声に包まれて育つ児童はきっと幸せに感じていることでしょう。今後、一層のご活躍を期待しています。

◆文系インターンシップ推進モデル事業（COC+事業）

1. 概要

本事業は、若者の地元定着率の向上と地域経済の発展を目指した、北九州市と地元大学との連携による文部科学省の補助事業「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の中で実施する。北九州商工会議所と北九州市が市内の大学や短期大学と連携し、文系学生を対象に地元中小企業の魅力の発信、地元企業で就業体験を行う「インターンシップ事業」を実施することで、地元への就職を促進し、地方創生を推進する。

2. 経緯

時期	事項	内容
H27年6月17日	学生の就職支援に関する意見交換会	北九州市における地方創生の基本方針の説明があり、学生の地元就職に係わる現状と課題について、北九州近郊の大学と北九州市が意見交換をした。
H27年7月27日	北九州商工会議所に対し、本学における北九州市管内でのインターンシップ先の情報提供	北九州商工会議所からインターンシップ先開拓の協力依頼があり、各大学が所管しているインターンシップ先の情報提供が行われた。
H27年9月24日	北九州商工会議所より、インターンシップ先の開拓状況の報告	北九州商工会議所から文系インターンシップの開拓状況等の説明があり、今後は地域教育実践研究センターが窓口として手続きを行っていくこととなった。
H27年10月14日	文系インターンシップ事業の実施内容に関する意見交換	本学と北九州商工会議所と本事業の実施内容について意見交換した。また、相互連携による地域活性化、ならびに本事業の円滑な運営を図るため、連携協定締結を前提とした意見交換をした。
H27年10月22日	文系インターンシップ事業について学生へ説明	北九州商工会議所から本学学生に対し、文系インターンシップ実施に関する説明が行われた。
H27年11月9～20日	文系インターンシップ募集期間	所定の申込書による公募の結果、問い合わせ人数は38名、申込書提出による最終申し込み人数は21名となった。
H27年12月25日	北九州商工会議所から企業の受入回答（最終）のお知らせ	学生の申込者21名のうち、2名がマッチング不可、1名が企業側のキャンセルにより、最終参加者は18名となった。受入回答については、企業から直接学生に連絡し、その際に日程を調整した。
H28年1月8日	本学主催の事前説明会開催	参加学生を対象に事前説明会を開催し、マナー講習を行い、誓約書を提出させ、業務日誌等必要書類を配布した。
H28年1月14～16日	北九州商工会議所主催のマナー講習会開催	北九州商工会議所主催で3日間のマナー講習会が小倉（毎日西部会館）、および黒崎（コムシティ）で開催された。学生は、3日間のうちいずれかの1日に参加した。
H28年1月29日～3月4日	文系インターンシップ実施	学生が随時インターンシップに参加した。
H28年3月	インターンシップ終了後の手続き	本学から北九州商工会議所へ実習日誌、およびアンケートを送付し、評価表を受領した。

3. 本モデル事業の実施状況

項目	実施状況
参加大学 参加学生数	北九州市立大学:22名 九州共立大学:22名 九州国際大学:4名 西南女学院大学:31名 折尾愛真短期大学:2名 九州女子大学:18名 計99名
参加企業数	48社 (受入企業数31社)
実施時期	H28年1月～3月 (マナー講習会H28年1月14～16日)

4. 本学の実施状況

【学科別参加人数】

学科名	人数
人間生活学科	3名
栄養学科	2名
人間発達学科 人間発達学専攻	3名
人間発達学科 人間基礎学専攻	10名
合計	18名

問い合わせ人数：38名

最終申込み人数：21名

最終参加人数：18名

(マッチング不可2名、企業側のキャンセル1名)

【実習先一覧】

受入先	日程	日数	人数
株式会社タカギ	1月13日	1日間	1名
大英産業株式会社	1月29日	1日間	1名
有限会社マーサ	2月2日～4日、9～10日	5日間	1名
株式会社七尾製菓	2月3日	1日間	1名
小倉ターミナルビル株式会社	2月17日または3月2日	1日間	10名
株式会社朝日広告社	2月17日～19日	3日間	1名
北九州ダイハツ販売株式会社	2月24日	1日間	1名
クラウンフーズ株式会社	3月2日～4日	3日間	2名
合計			18名

【本学学生および実習先企業コメント】

学生	実習先企業
<ul style="list-style-type: none"> グループディスカッションや仕事内容の説明を聞く中で、社員の方々が自社製品を誇りに思っていること、また、仕事に対するプロ意識の高さを感じ、自分自身を見直すことができた。 既存商品の新開発や実習作業、パッケージのデザインなどを行った。社員の方の対応が丁寧で優しく、実習しやすい環境だった。 初めて知る業界の内容の中で仕事の取り組み方の大切さを学び、ディスカッションをすることで広い視点が持てるようになった。 インターンシップを通して「仕事とは何か」ということを学ぶことができた。それぞれの業務の中にはビジネスマナーがあり、それを実行していくことの重要性、また、人とのコミュニケーションの大切さを学ぶことができ、充実した時間を過ごすことができた。この学んだことを社会人になったときに活かしていきたいと思う。 会社概要や製品の説明、各部署の見学、お客様の要望に精一杯応えようと真摯に仕事に打ち込む姿に学ぶものが多くあった。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習では初めての作業でもテキパキやろうという姿勢が見え、企画実習では積極的に質問や意見を出していた。また、着眼点がよくアイデアが豊富だと感じた。質問にもスムーズに回答でき、よく自分の中でシミュレーションができていたと感じた。 お客様目線で考えるCS向上のテーマにもしっかりとレポートを作成し、社内的にも参考になった。 当社の仕事に興味を持って、1つ1つの仕事に真剣に取り組んでいた。周りのスタッフからの指示に対しても、正確・丁寧に業務をこなしており、その部分は今後も継続して欲しい。特に最終日は自分の思うこと・感じたことを素直にスタッフと話し、やり取りできていたように感じた。 説明に対し、疑問点などを積極的に質問してくる等、向上心・探求心の強さを感じた。メモ等も良く取り、学習態度は真面目で挨拶もきちんとしていた。専門的な分野にも大変興味を示し、質問していた。 少し緊張していたが、自己分析や企業研究等、インターンシップに臨む姿勢が印象的であった。

◆北九州市教育委員会との学生ボランティアに関する協定事業

1. 概要

平成27年12月10日、九州女子短期大学と北九州市教育委員会は、相互の教育資源の有効活用による教育研究活動や学校教育活動等の活性化を図るため、学生ボランティア事業について協定を締結した。なお、九州女子大学については、同協定を平成24年度に締結している。

2. ボランティアの内容

本学の学生を北九州市立の小・中・特別支援学校へ派遣し、授業や課外活動、休み時間などの教育活動に参加させる。

◆芦屋町との包括協定に向けた取り組み

1. 概要

平成28年3月29日、実践教育の場で社会の期待に応えられる学生を育成するため、芦屋町と包括的地域連携に関する協定を締結した。芦屋町と協定を締結することで、双方の持つ資源を結集し、行政や地域が抱える課題の解決や、社会性や実践力を身に着けた学生の育成など、双方のメリットを効果的かつ最大限に活かすとともに、双方の取り組みを推進する。

2. 協定事項

- ・地域の活性化に関すること
- ・地域の福祉向上に関すること
- ・地域の生涯学習に関すること
- ・地域の人材育成に関すること
- ・地域の教育振興に関すること
- ・その他目的を達成するために必要な事項

3. 協定締結に向けた検討経緯

時期	事項	内容
H27年10月13日	第1回 芦屋町との包括協定に関する 連携会議	本学と芦屋町で何が連携できるか意見交換し、芦屋町の抱えている地域課題(例：若者の定着、保育士不足等)について本学の学術成果で連携が可能かを検討した。協定の締結については、芦屋町が12月の議会に報告し、1月に協定を締結する予定で調整することとした。
H28年1月13日	第2回 芦屋町との包括協定に関する 連携会議	芦屋町が本学との連携事業の要望について提案した。芦屋町が連携事業の内容をさらに精査し、1月下旬に再確認することとした。協定の締結については、3月18日以降を締結日にすることで再調整した。
H28年1月27日	第3回 芦屋町との包括協定に関する 連携会議	芦屋町が本学との連携事業の要望について、7事業を具体的に提案した。当該事業の具体的な現状、課題、および連携内容について意見交換した。また、平成28年度の実施事業の企画案は、協定締結後の4月以降に協議することとした。
H28年3月8日	第4回 芦屋町との包括協定に関する 連携会議	本学と芦屋町との調印式の日程を3月29日で合意した。また、調印式に係るプレス用資料、調印式の進行要領、バックボードのデザイン案等の各種資料については、芦屋側が原案を作成して本学へ提示することとした。



5. その他の地域連携諸事業

食の都(みやこ)構想事業

一般社団法人北九州青年会議所、およびスターフライヤーが北九州に根付く魅力的な弁当を創出し、北九州の魅力を外内に発信していくことで市民力の活性化に繋げるため、「北九州空弁(そらべん)」の開発を企画した。これに伴い、当該弁当の栄養管理について、本学の地域教育実践研究センターに依頼があった。この依頼を受け、栄養学科に本件を依頼し、永田講師が担当した。

平成27年12月11日、北九州空港において、東京行き(SFJ80便)の搭乗客約140人に対し、「北九州空弁(そらべん)」が無料配布された。

今後は、商工会議所の会員を中心に別組織をつくり、メニューの見直しに取り組むほか、商品化を希望する企業にはレシピを提供することとなった。



折尾地区防犯啓発イベント

平成27年12月19日、折尾駅周辺において、折尾地区防犯啓発イベントを折尾地区安全安心連絡協議会の当番校である本学主催のもと、8大学および折尾警察署等と連携して実施した。

本イベントは、折尾地区の大学生等が防犯や地域の交通安全について考えて行動することで、安心に生活できる社会の実現を目指すため、以下の事業を実施し、防犯意識の高揚を図った。

- ①折尾駅での性犯罪抑制に係るチラシ配布
- ②青色パトロールカーへの乗車体験
- ③防犯カメラ設置にむけた署名活動

今後の展開として、折尾の市民が犯罪や事件に巻き込まれた場合に駆け込むことのできる安全・安心な場所を設置する。安全・安心な場所とは、折尾の市民の賛同を募り、本学の防犯キャラクター「まもるっ家(ち)」のステッカーを自宅、店舗等に貼ってもらうことで町の安全・安心な場所とする。



九女型人材育成プログラム「オフキャンパス研修」

平成27年12月23日、24日、グローバルアリーナにおいて、人間生活学科1年生を対象に1泊2日で課題解決型のワークショップを実施した。

本ワークショップは、これからの社会で必要とされる知識を活用して課題を解決するリテラシーと、人と自分に最適な状態をもたらそうとするコンピテンシーを併せ持つジェネリックスキルを身に付けることを目的としている。この目的を遂行するため、北九州市における「女性が輝くための街づくり」というテーマ設定で、各種資料を班ごとに読み解き、課題発見～解決策をパワーポイントで発表した。

学生たちは、この研修を通して、与えられた課題に対してチームで働く力を養い、対人スキルや対自己スキルを伸ばした。また、課題に関する資料分析、課題発見、解決策の構想・表現というプロセスをたどりながら、課題解決、知識活用型思考のトレーニングを行った。

この九女型人材育成プログラムの取り組みは、まだ始動して間もないが、卒業時には「九女に来て良かった」「自分の希望の職業に就けた」となるように、教職員が一丸となって進めていきたいと考えている。

若松区中川町の旧住宅街における空き家再生、地域活性化活動「ワカマツグラン」

平成27年4月、本学の人間生活学科に北九州市から若松区の中川町周辺のリノベーション計画の要請があった。中川町は、戦後に建てられた旧住宅地で60年程度が経過し、現在6割が空き家となっている。

また、商店街も過疎化が進み、賑わいが失われている。このことから、本学の人間生活学科が協賛の立場で、地域の活動組織「ワカマツグラン」や北九州市産業経済局と共同しながら、空き家の再利用方法を協議し、併せて地域活性化活動を以下のとおり行った。

【空家再生事業】

活動1：街区模型の制作

対象となる住宅街区の住宅地図を入手し、現地調査を行ったが、地図と現状に大きな食い違いが有ることが分かった。そこで現地調査と測量を行ないながら、街区全体の1/50模型を作製した。

活動2：地域の魅力を発掘

住戸の中には倒壊寸前の建物も有り、調査を行った学生たちの目には、「とても住めたものではない」と映っていた。そこで、学生全員で、地域の魅力を発掘する作業を開始し、「古くても清潔なら良い。汚いのと虫が居るのが我慢できないが、路地は魅力的である」と意見がまとまり、クリーンな街区への活動が動き始めた。

活動3：ゲストハウスの検討

国家戦略特区の民泊の話が提案され、外国人向けのゲストハウスの需要の高いことが見込めた。このことから、ゲストハウスはかなり有力なリノベーションプランとなることが考えられ、その方向で関係省庁との打ち合わせを始めた。

活動4：国家戦略特区の民泊の検討

国家戦略特区に北九州市が認められ、具体的な物件事例として、若松のプロジェクトに焦点が当てられ、民泊を実行することとなった。民泊は政府の、外国人インバウンドの増加を見越しての方針であるが、法律的な肉付けが未完なため、関係省庁と打ち合わせながら、年内の成立を目指すことになった。

【地域活性化事業】

活動1：数々のイベントに参加

①餅つき大会へ参加し、近隣へ餅を配布、②地域住民や北九州市の方々、活性化策を話し合う会に参加、③リノベーションスクールに参加し、セルフリノベーションに参加する等、ワカマツグランの活動に学生たちが参加して活動を盛り上げた。

活動2：ぺったん焼き新メニュー

若松のご当地メニュー、ぺったん焼きを広める「ぺったん焼き隊」の活動に協力して、若松のご当地食材、塩キャベツやトマトなどを生かした新メニューを開発した。

【今後の展開】

- 空き家の再生に民泊を用いるのは、方向性としては十分に効果的であると思われる。従って、今後も継続して挑戦し、実現させたいと考えている。
- 福岡県における外国人旅行者の増加は顕著なものがあり、ゲストハウスにしる民泊にしる、このプロジェクトが完成すれば良い前例と成り得る。そのためにも関係省庁との連携を十分に図りたい。
- ペったん焼きも旅行者向けにPRしたいメニューである。是非ご当地メニューとして復活させ、活性化させたい。
- 地域の商店街も、外国人旅行者の誘致には協力的で、この路線により若松を広くアピールし、2～3年以内には活性化した町に生まれ変わらせたいと考えている。



6. 学外実習および介護等体験、教員免許状更新講習等

◆平成27年度 学外実習および介護等体験の実績

【九州女子大学】

(人数)

実習名	学科・専攻名	学校種別等	1年	2年	3年	4年	
教育実習	人間生活学科	中学校 高等学校	/			15	
	栄養学科	小学校				2	
	人間発達学科 人間発達学専攻	幼稚園	/		69	94	
		小学校			67	56	
		特別支援学校	/			49	
人間発達学科 人間基礎学専攻	中学校 高等学校	28					
保育実習	人間発達学科 人間発達学専攻	保育所	/	85	76	/	
		児童養護施設等	/			78	
臨地実習	栄養学科	福祉施設・保健所	/		82	/	
		小学校			82		
		病院			82		
介護等体験	人間生活学科	特別支援学校 社会福祉施設	/		24	/	
	人間発達学科 人間発達学専攻				58		5
	人間発達学科 人間基礎学専攻				29		/

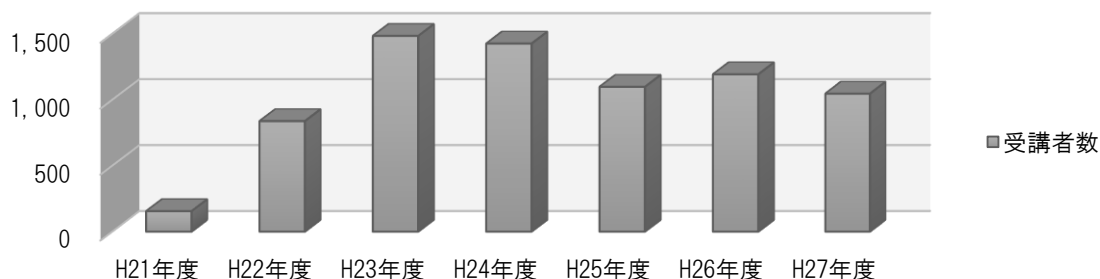
【九州女子短期大学】

(人数)

実習名	学科・課程名	学校種別等	1年	2年
教育実習	子ども健康学科 幼稚園教諭養成課程	幼稚園	/	73
	子ども健康学科 養護教諭養成課程	小学校・中学校 高等学校		91
	専攻科 子ども健康学専攻	小学校・中学校 高等学校		27
保育実習	子ども健康学科 幼稚園教諭養成課程	保育所	80	20
		児童養護施設等	74	50
	子ども健康学科 養護教諭養成課程	保育所	40	17
		児童養護施設等	40	24
臨床実習	子ども健康学科 養護教諭養成課程	病院・福祉施設	/	91

◆教員免許状更新講習の受講者推移（平成21年度～平成27年度）

	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度	H27年度
講座数	15	16	20	20	17	17	19
受講者数	155	838	1,484	1,426	1,098	1,193	1,046



◆平成28年度 教員免許状更新講習の開設予定講座（8/5～8/10）

日程	領域	講座名	講師名	定員数	講座名	講師名	定員数
8/5 (金)	必修	①教育の最新事情(必修領域) 幼・小	大迫(秀) 鎌田	140	②教育の最新事情(必修領域) 中・高・養	大迫(秀) 鎌田	90
			木山 井上			木山 井上	
8/6 (土)	選択 必修	③学校を巡る近年状況変化、危 機管理上の課題 幼・小	大江 宮本	140	④学校を巡る近年状況変化、危 機管理上の課題 中・高・特支	神代 宮本	90
8/7 (日)	選択	⑤教室の中の宮沢賢治	荻原	100	⑥宮崎アニメを《読み解く》	河原木	90
		⑦児童・生徒の健康と食生活	許斐 濱寄	60	⑧「生きる力」を育む表現遊び	谷口	50
8/8 (月)	選択	⑨文系でまなぶICT(情報通信技 術)活用	宮本	55	⑩表現講座	青山 中村	60
		⑪宮崎アニメを《読み解く》	河原木	90	⑫数学への算数 算数からの数学	宮川	30
		⑬染色と包む ～布の機能性を 改めて学ぶ～	上原	16			
8/9 (火)	選択	⑭「筆えんぴつ」による手書き 文字教育の試み	大迫(正)	140	⑮体験的な学習を導入した食育 について	糟須海	30
		⑯英語コミュニケーションの基礎	ダタール	50	⑰フリーソフトウェアを使って マルチメディア入門	宮本	55
8/10 (水)	選択	⑱「筆えんぴつ」による手書き 文字教育の試み	大迫(正)	140	⑲発達障害児の理解と支援	堀江 石黒 阪木	72
		⑳中国の書論を読む	古木	30	㉑児童・生徒のこころのありか たと教育相談による支援	友納	55

編集後記

本誌は、平成27年度に九州女子大学・九州女子短期大学、および地域教育実践研究センターで実施した地域連携事業を皆様にご理解いただくため発刊いたしました。

地域教育実践研究センターは、新設間もない組織(平成27年6月)ではございますが、本年度は、北九州市との連携事業を中心に、芦屋町と包括的地域連携協定の締結、および文部科学省補助事業の地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)など、様々な事業に積極的に取り組むことができました。

本誌を契機として、皆様と新たな連携事業を実施できることを期待するとともに、本学の地域連携活動、および地域貢献活動のさらなる発展を目指していきます。

地域教育実践研究センター 所長 古城 和子

平成27年度 地域連携事業報告書

発刊：平成28年3月31日

編集：学校法人福原学園 九州女子大学・九州女子短期大学
地域教育実践研究センター

〒807-8586 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1
Tel：093-693-3118 Fax：093-693-8203
E-mail：chiiki-c@fains.jp

